

擦文時代

擦文時代（西暦 600～1200 年）の文化は北海道に特有のものであり、日本の他の多くの地域の文化とは異なっていました。擦文時代の文化は、縄文時代（紀元前 13,000 年～紀元前 500 年）の狩猟採集文化が継続したものです。南にある本州の社会からさらなる影響を受け、技術が持ち込まれました。かまど、鉄器、織物が徐々に導入されました。寒冷な気候により稲作は不可能でしたが、キビや大麦のような穀物が育てられました。

釧路で発見された擦文土器には、木のへらで刻まれた模様があります。擦文土器の中には、北にあるオホーツク社会の土器に典型的である盛り上げた飾りと、これらの刻まれた模様の両方を有するものが見つかっています。5 世紀以降、ユーラシア大陸から渡ってきた人々が、千島列島や樺太島といったオホーツク海周辺の地域に定住しました。これらの人々は、現在のロシア東部と中国北部の国境地帯にあるアムール川流域からやって来たと考えられています。この人たちは、海岸の集落に住み、クジラやアザラシといった比較的大型の海獣を狩り、犬や豚を飼っていました。そして、これら北方の人々と、北海道の住民との接触が増えていきました。それを、擦文土器の様式とオホーツクの装飾との融合に見ることができます。一部の考古学者は、この文化の出逢いがアイヌ文化を生んだ、と考えています。